

北海道内学生企画展「アートに触れる」

- 札幌駅前通地下歩行空間での展示会に参加して -

Report on the Art Exhibition of “Touch the Art Hokkaido 2011-2014” and its foresights.

藤森修¹

Osamu Fujimori²

要旨

これは北海道内学生企画展「アートに触れる」の報告である。主催者である北海道デザイン協議会、札幌駅前通まちづくり株式会社の関係者と道内の大学・専門学校の参加学生と共に本学の有志学生が参加した展示会のイベントである。本学は初回の2011年から参加し、昨年の2014年度をもって計4回の経験となる。本稿では過去4回にわたる本学学生の学外での作品傾向、及び反省点を主にレポートするのが目的である。

Abstract

The aim of this report is to review the organized art exhibition, called “Touch the Art Hokkaido.” Our students joined this event from 2011 to 2014. It was the first time for our students to exhibit their artworks in the underground public space in Sapporo, through which many pedestrians passed and viewed their art each day.

キーワード：アート、展示デザイン、公共空間

Keywords: Art, Exhibition Design, Public Space

1. はじめに

北海道内学生企画展「アートに触れる」は北海道内の美術、デザイン、建築の分野を学ぶ大学生、専門学校生が札幌駅前通地下歩行空間の北4条展示空間にて概ね一週

¹東海大学国際文化学部デザイン文化学科、005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of Design and Culture, School of International Cultural Relations, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

間にわたり「触れる」をテーマに作品展示を行うイベントである。参加学校は毎年10校前後であり、参加学生は約200名強に及ぶ多くの関係者で成立する展示会である。出展作品の分野としてはアートに限らず、造形、デザイン、クラフト、建築である。これは芸術工学部の建築・環境デザイン学科、暮らしデザイン学科、及び国際文化学部のデザイン文化学科を擁する本学の学びと十分接触面のある分野といえる。

本学が参加の契機として、2011年の8月に筆者が札幌市立大学の知人教員より打診があり、学内で同企画を学生に告知したところ若干名の希望が確認できたことから参加に至ったという経緯がある。

2011年度(図1)，筆者の本務先は芸術工学部(旭川校舎)であったため、遠方である札幌でのイベント参加には問題が少なくなかった。その後の2012年度は札幌校舎にデザイン文化学科が設置され、デザインを学ぶ学生には恵まれたものの、学年が浅く未だ発表できる作品制作には至らなかつたため、引き続き芸術工学部の学生を主軸に出品した。2013、2014年度はデザイン文化学科の学生を中心に企画・運営に参加する方針に至っている(図2)。

本学においては今までにも「学科作品展」「学生有志展」「所属サークル作品展」「卒業研究展」など頻繁に学内外で行ってきた経験・蓄積がある。だが乱暴な言い方をすると、作品発表の環境は常に「好条件」であった。つまり学内の展示スペースや学外のギャラリー等、そこに集う鑑賞者は決まって作品発表に十分理解を示す対象に限られていたともいえる。

一方「アートに触れる」の展示スペースは、様々な目的の通行人が行き来する地下歩道である。美術品を静寂に真摯に鑑賞できる空間とは言い難いため、数々のジレンマを浮き彫りにした展示会でもあった。

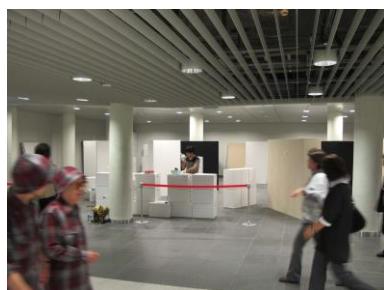


図1：展示作業風景 2011年



図2：展示作業風景 2014年

本企画の展示会「アートに触れる」は出展作品に自由に「触れる」ことが目玉であった(残念ながら実現したとは言い難く今後の課題でもある)。会場は常に騒がしく、時には望まない訪問者も行き来する場合もある。これらの環境を前提にどのような作品創作が可能であろうかという筆者の個人的な関心も大きい。この場においても果たして「アート」として市民に認識されるのだろうか(図3~6)。その場合、ここではより作品に強度が求められるだろう。また地下歩行空間という特殊な場の文脈も作品制

作に影響を与えるものであってほしいという期待もあった。

以下、過去4回の本学学生の作品動向をレビューする。次年度の参加に向けて更なる質の向上に期待したい。



図3：展示風景 2014年
(展示終了後の時間はパイロンで立入り禁止となる)



図4：展示風景 2014年



図5：オープニングの様子 2011年



図6：会場を横切る通行人 2011年
(グレーのタイルのエリアは人々の滞留が許される場である)

2. 展覧会の概要

展覧会のテーマは「アートに触れる（ふれる・さわれる）」であり、これは2011年度以降一貫している。同展の企画書によると概要は以下の通りである。

見る人の心に触れる、感性・感覚に触れる/共鳴する、作品に触れる、見る人が参加できる、動かせる、持ち帰れるなど、鑑賞するという作品だけでなく、触れる（ふれる・さわれる）という要素を持った作品も展示する。会場の特性として「触れられてしまう」という可能性が多いことを、マイナス要素ではなくプラスに考えていくことで、新たな作品の創造をしていく。（以上、企画書より）

上記の通り、この展覧会は通行人が気軽に立ち寄り、作品を触り楽しむというのが出発点だったのだが、展示された作品がすべてこの意図に沿ったものとは言えないのが実情である。作品に感動した折、I am greatly touched by this artwork. のように、感動=touchと拡大解釈し出品した作品も多いといえる。

展示会場は札幌駅前通地下歩行空間（通称：チカホ）の地下鉄さっぽろ駅側に構える北4条展示空間である。床面積はおよそ30メートル×10メートルに及び、約300m²

のスペースである。天井高は 2.5~2.79 メートル程度であり展示空間としては十分な高さとは言えない。

会場は公共空間であり、かつ「道路」の一部のため様々な規制が働いた。特に防犯面の厳守項目は少なくない。まず燃えやすい紙などの可燃性の高い作品は出品が許されない。市民に対して当該分野への親和性を訴求したいものの、一方では子供に触れられ動かされてしまうことによる事故の危険も十分に検討しなくてはならなかった。周囲に据えられている防犯カメラの死角となる展示デザインも却下となる（これは本学において悩ましい問題となった）。道路管理者と広場管理者双方との協議を重ねて設置方法等を練る作業が繰り返されたが、これらの作業は北海道デザイン協議会の関係者が的確に対応していただき展覧会の実現に至った。

「地下歩行空間」という多くの市民が行き交う場においては学生にとっての格好の作品発表のチャンスとなる。一方で通常の作品発表の場である美術館やギャラリーでの展示会ではないため、アートに興味のある客層に限らず作品を見られるという事は学生にとって試練の場ともなりうるだろう。札幌市民においてもアートに触れる場となり、当該分野の関心を高める意味で意義ある試行である。

作品搬入、搬出作業においてはあくまでも歩行者が優先となることに気を留め行わなければならなかった。近年、エレベーター内の破損事故が多発していることから、十分な養生のうえ作品を毛布で包んで二人以上の運搬を絶対条件とするなどの規則が徹底された。これは通常の貸しギャラリーでの展示会とは大きく異なる要因であった。また会場の天井には一切作品が触れてはならないことも難題であった（このため以後辞退した大学もあった）。これは天井よりモビールのような作品を吊ることが許されないということも意味した。また地下歩行空間では数種のイベントが同時並走しており、展示設営作業を煩雑化させる要因となった。改めて「公共空間での展示」の労苦を再認識させられたと言える（図 7）。

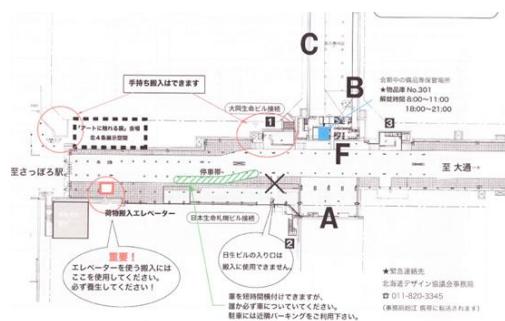


図 7：搬出入の注意点を示したマップ

展覧会の企画、運営については、2011 年度は主たる部分を主催者である北海道デザイン協議会の専務理事・畠江俊明氏をはじめとする理事の方々がプロジェクトマネージャー、事務局、展示、広報の各担当を分担し運営して頂いた。会期中のシフトも理事の方々が当番制で行い、各学校の担当教員が時々立ち会う程度であった。2012 年度

からは方針を一変させ、学生が主体となって運営していく実行委員会を発足した。ちなみに2014年度の進行においては、以下の通りであった（以下、企画書より）。

- 7月上旬：実行委員会の設置、企画会議（組織・体制作り）
- 7月中旬：参加校・参加者募集
- 8月上旬：学生実行委員会（定例）
- 8月上旬：会場構成案制作
- 8月上旬：参加学生に対する説明会/会場視察
- 8月中旬：DM等パブリシティ制作
- 8月中旬：出展作品の確定・管理者側への内容説明
- 9月上旬：DM等を配布
- 9月上旬：案内パネルなど展示関連物を制作
- 9月中旬：会場の人員配置などローテーション作成
- 10月5日：会場建込/会場設営・搬入
- 10月13日：16:00 搬出

「アートに触れる」では7月上旬に各学校の担当教員を通じて参加学生希望者を募集し、主催者が用意した会議室等にて学生実行委員会の場を設けた。第一回実行委員会にて前年度の反省と次の展示に向けての様々な意見交換が行われた。この場にて「学生代表」となるリーダー、副リーダーを決め、次に「展示企画/展示運営チーム」と「広報企画チーム」に分かれて担当学生を配置する組織を作った。尚、2012年度より搬入、搬出、会場の維持管理などの運営は原則的に参加学生全員の参加により行った。学生に責任感を与える「自分たちで作った展覧会」であるという意識を萌芽させる方針は以来現在まで続いている。

このイベントでは展示期間中に市民を巻き込む参加型ワークショップも行った。実行委員会では学校の垣根を超えてこれらの企画を練ることに労力を費やした。定例会では衝突を恐れず膝を突き合わせて議論することでワークショップを成功させてきた。



図8：ワークショップ企画の様子 2014年

2011年度は他大学の学生が市民を前にライブペイントを行い話題となった。2012年度からは市民が創作活動に参加できる開かれたワークショップの有り方が提案され、以後踏襲された。例えば来場者の誕生日や将来の夢などのメッセージを添えた紙片を

学生指定のオブジェに自由に貼ってもらい日々作品が成長していく。こうした動向は「時代性」と判断できようか。アーティストとしてのスキルの一方的なプレゼンテーションではなく、一步引いたところで他者を巻き込みイベントを行う姿勢は控え目ではあるが、公共空間という特異な場を意識した企画であると評価できるものである。つまり従来アートにあまり関心を持たなかった通行人に対しても当該分野の楽しさを伝え、共に場を作っていくとする前向きな空気である。

3. 「アートに触れる 2011」レビュー



図 9：リーフレット 2011 年

北海道内学生企画展「アートに触れる 2011」(図 9)

日時：2011 年 9 月 27 日(火)～10 月 6 日(木) 10:00～20:00 (最終日 17:00)

参加学校：11 校 総参加学生：126 名

札幌大谷大学、札幌市立大学、東海大学(旭川・札幌)、道都大学、北翔大学、北海学園大学、北海道教育大学(岩見沢)、北海道芸術デザイン専門学校、北海道情報大学、北海道造形デザイン専門学校、北海道大学(五十音順)

総動員数：3000 名(平日平均：250 名 土・日曜日：500 名) ※会期中にて北海道新聞の記事(2011 年 9 月 29 日, 30 日) や NHK ニュースでの放送(2011 年 10 月 4 日) も来場者に大きな効果を与えた。

本学の参加学生名・所属：

岩田和大(芸術工学部建築・環境デザイン学科 2 年)

竹田けいこ(芸術工学部くらしデザイン学科 3 年)

宮崎眞吾(芸術工学部くらしデザイン学科 2 年)

押野哲也(芸術工学部建築・環境デザイン学科 2 年)

寺島良成(芸術工学部建築・環境デザイン学科 2 年)

石田渉(芸術工学部建築・環境デザイン学科 4 年 藤森研究室) ※図面作成協力

西能智章(芸術工学部くらしデザイン学科 3 年) ※展示設営協力

本多真菜(芸術工学部くらしデザイン学科 3 年) ※展示設営協力

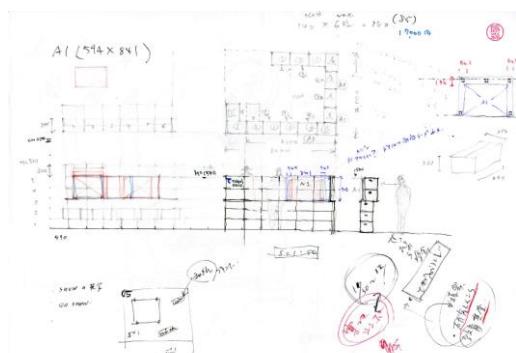


図 10：展示デザインの検討
(作図：筆者) 2013 年

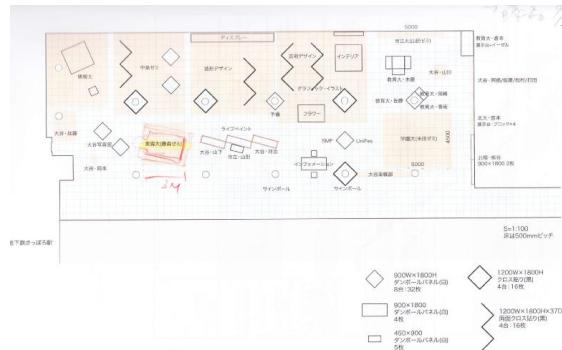


図 11：会場のレイアウト 2011 年



図 12：展示デザインの検討模型
(制作：筆者) 2011 年



図 13：展示作品 2011 年



図 14：展示作品 2011 年
(展示壁にはキャスターが付けられ必要に応じて動かすことができる)

3.1 概要等

この年度は筆者及び参加学生が旭川校舎所属のため、会場との距離より生じる物品等の運搬方法に悩まされた。そこで、折りたたんだ状態でスムースに運搬することのできる「段ボール箱」で展示壁を作る方針となった（図 10~12）。筆者は同年度には旭川校舎研究館ギャラリーにて「東京学外研修報告・展示会」を行った。その折に同素材を使用したのだった。そこで改めて（株）片桐紙器の屋根田和利氏に「アートに触れる」の企画を相談する過程で「会場は多くの市民の目に触れる」という利点があるためスポンサーとしておおよそ 100 箱の提供及び配送の協力を得ることになった。

では問題の展示作品であるが、熟慮を重ねた結果、2010 年より旭川キャンパス屋外

に設営していた書棚上のスチールによる作品「Design with Snow」の時間経過により雪景の移ろいを撮影した「降雪現象に現れる雪景展」とした。これは本学の林拓見教授（2013年退職）と伊藤明彦教授と共に科学研究費補助金により実施・研究してきた共同作品である。

会場にて展示空間を作るに当たっては、ヘルパーとして学生も駆けつけ計2日をかけて無事作業を終えた（図13~18）。尚、制作過程で幾つかの問題も生じた。まず会場の防犯面の見地より「見通し」が絶対条件であると指摘された。特に既設の防犯カメラの死角にならないことが必須であった。段ボール箱の積層により視界をブロックしがちであったが開口部を適宜設け微調整を繰り返した。また防災面からも指導があった。展示壁に使用した段ボール箱の持ち手の部分（開口部）に煙草を入れられると火災を生じるという危険性から、すべての持ち手の開口をテープで塞ぐことで対処した。

会期中はリーフレットを600部用意したのだが、2、3日ですぐに無くなってしまった。改めてこの会場のポテンシャルと向き合うことになったのである。



図15：展示写真より 2011年



図16：展示写真より 2011年

この年度の「アートに触れる」会場内アンケート（回答総数：627）によると、訪問者の展覧会への来場の切掛けは「たまたま通りがかった」が73%を占めていた。展示会の感想としては99%が「評価する」であり、展示作品数としては78%が「適切」、また地下歩行空間を会場とする展示会は92%が「適している」であった。

尚、展覧会のアンケートの中には厳しい意見もある。全体的に「雑多である」という辛辣な意見や、良否を判断できないが「おもちゃ箱をひっくり返したようで面白かった」というものもあった。これらのアンケート結果は次年度の実行委員会にて「昨年度の反省点と今年度の改善」に向けて冷静に話し合われた。但しこの種の展示会において、前年度の参加学生は引退・卒業し組織が継承されにくいという問題点があるといえる。



図 17：展示作品 2011 年
(通行人に対して効果的に対峙させた)



図 18：展示作品 2011 年
(防犯上の考慮より閉鎖的になることを避け必要に応じて開口部を設けた)

4. 「アートに触れる 2012」レビュー



図 19：リーフレット 2012 年

北海道内学生企画展「アートに触れる 2012」(図 19)

日時：2012 年 9 月 26 日(水)～10 月 2 日(火) 10:00～20:00 (最終日 17:00)

参加学校：11 校 総参加学生：160 名

札幌大谷大学、東海大学(旭川・札幌)、道都大学、北翔大学、北海学園大学、北海道教育大学(岩見沢)、北海道芸術デザイン専門学校、北海道情報大学、北海道造形デザイン専門学校、北海道ドレスメーカー学院、北海道文化服装専門学校(五十音順)

総動員数：2700 名 (平日平均：300 名 土・日曜日：600 名)

本学の参加学生名・所属：

石川瑞羽 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年) ※企画・運営として参加

須永涼 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年) ※企画・運営として参加

川上純奈 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年) ※企画・運営として参加

高橋尚也 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年) ※企画・運営として参加

藤原智香子 + 中山響 (芸術工学部くらしデザイン学科 3 年)



図 20：展示作品のイメージ画 2012 年
(作図：出品者) (他の出品者との情報共有
の目的で描いた)

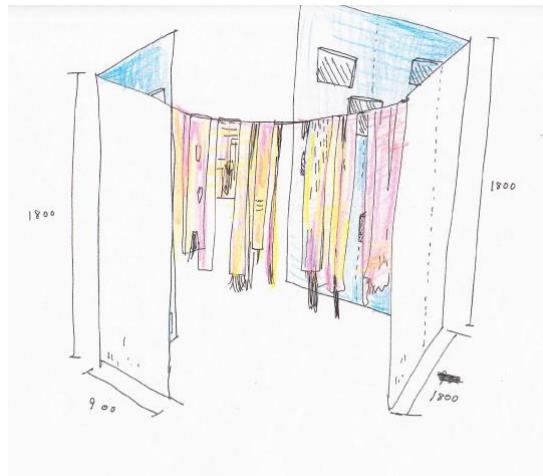


図 21：展示作品のイメージ画 2012 年
(作図：出品者)



図 22：展示作品 2012 年



図 23：作業状況 2012 年



図 24：作業状況 2012 年
(展示壁に写真作品を設置する様子)



図 25：ブース内部の展示状況 2012 年

4.2 概要等

この年度より「アートに触れる」は学生を主体として企画・運営していく方針に移行した。展示会中にも学生がシフトに入り数々の雑務に対応することとなったのである。実行委員会の定例会議を札幌まちづくり株式会社の会議室で行い (18:30~2 時間程度), 欠席者に対してもメール配信により情報共有を徹底した。本学からは運営面で 4 名の 1 年生 (国際文化学部デザイン文化学科) が関わり積極的に展示会をサポートした。作品出品者は筆者が旭川校舎で希望者を募り, 芸術工学部くらしデザイン学科 3 年生の藤原智香子さんと中山響さんの 2 名に決まった。出品者の 2 名は旭川校舎の所

属であることから実行委員会への参加は厳しかったが主催者にも理解を示していただいた。この年度は筆者が実行委員会に参加することで橋渡し役を務め、なんとか作品設営を終えた。

作品はユニークなものであった(図 20・21)。主催者が貸し出す巾 900 ミリ高さ 1800 ミリのハニカムボード(計 6 枚)で 2 つの L 型壁の平面を構成し、一坪程度の領域を作った。内部壁面に写真作品をランダムに展示し更に 2 つの L 型壁の上部には裂いたカラフルな布によりつくった「簾」を架け渡すことで空間の領域性を強調するものであった。また前年度の反省より内部に死角を生じないよう気を配った。

作品は多少私小説的な印象であるが、彼女たちの意向通りほぼファーストスケッチ同様に実現できた(図 22~25)。2 人は学内外にて多くの展示会の経験があることから、筆者は終始安心して作業を見守ることができた。

5. 「アートに触れる 2013」レビュー



図 26：リーフレット 2013 年

北海道内学生企画展「アートに触れる 2013」(図 26)

日時：2013 年 9 月 21 日(土)～26 日(木) 10:00～20:00 (最終日 17:00)

参加学校：10 校 総参加学生：203 名

札幌大谷大学、東海大学(旭川・札幌)、道都大学、北翔大学、北海学園大学、北海道教育大学(岩見沢)、北海道芸術デザイン専門学校、北海道情報大学、北海道造形デザイン専門学校、北海道文化服装専門学校(五十音順)

総動員数：2700 名(平日平均：300 名 土・日曜日：600 名)

本学の参加学生名・所属：

五十嵐礼奈+澁谷麻由+大村規子(国際文化学部デザイン文化学科 2 年)

岡田歩起(国際文化学部デザイン文化学科 2 年)※文画部所属

奥山香澄(国際文化学部デザイン文化学科 2 年)※文画部所属

川上桂(国際文化学部デザイン文化学科 1 年)※アートラボ(サークル)所属

木村祐一郎+中村涼(国際文化学部デザイン文化学科 1 年)

工藤晴人(国際文化学部デザイン文化学科 2 年)※アートラボ(サークル)所属

前川和範 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年)
 斎藤真紀 (国際文化学部デザイン文化学科 1 年) ※アートラボ (サークル) 所属
 斎藤瑞希 (国際文化学部デザイン文化学科 1 年) ※アートラボ (サークル) 所属
 鈴木新八 (国際文化学部デザイン文化学科 1 年) ※アートラボ (サークル) 所属
 関花恵 (国際文化学部デザイン文化学科 1 年) ※アートラボ (サークル) 所属
 須永涼 (国際文化学部デザイン文化学科 2 年) ※企画・運営として参加

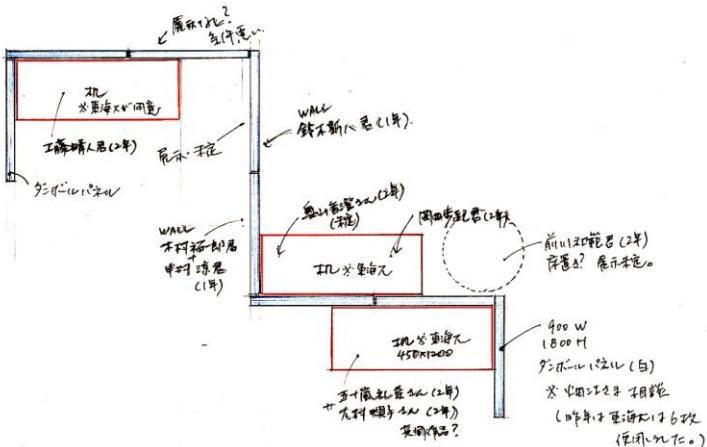


図 27：展示デザインの検討
 (作図：筆者) 2013 年

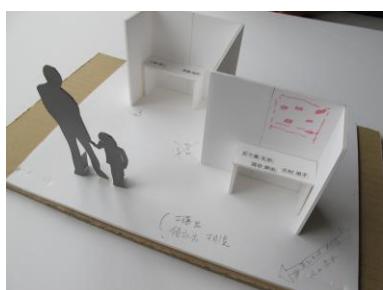


図 28：展示デザインの検討模型
 (制作：筆者) 2013 年

5.2 概要等

この年度より参加者・関係者はフェースブックグループを活用し情報交換する方針となつた。本学の展示作品は美術系サークル「アートラボ」の学生作品が主であった。サークルが立ち上がり、まだ日が浅かったため出品された作品はこの企画のために制作されたものではなく過去に制作（高校時などを含む）された作品であった点が残念であった。地下歩行空間という場の文脈とは疎遠な作品の披露に留まりインパクトに欠けるものであったことは否めない。

また展示デザインという面でも反省させられた。実行委員会で割り当てられた本学のスペースに、主催者から貸し出されたハニカムパネルを L 字型に組み強度をクリアした。金物として使用したアングルはオグリーな印象を与えてしまったと考える（訪

問者より批判的意見を頂いた)。壁面の強度をより高める目的もあり、L字の入隅部分に筆者がシナランバコア材（厚さ18ミリ）を天板とした簡易展示台を3台設置した。出品者が天板上のディスプレイを工夫する時間・余裕が無く、これは非常に貧しい印象となった。

ハニカムパネルにおいては直前まで他のイベントに使用されていた使い回しであり、傷みの激しいものであった（当該年度で廃棄した）。会場は節電でダウンライトが間引きされ、薄暗い照度しか確保できず作品によっては非常に暗い環境に置かれた。また会期中には川上桂君のガラス作品が破損してしまったことも反省点の一つである。展示デザインの工夫で回避できたのではないかと猛省させられた。ただし、直前に飛び込みで参加した木村祐一郎君＋中村涼君の写真を使用したコラージュ作品は会場の雰囲気と合致していたことを付け加えたい。

6. 「アートに触れる 2014」レビュー



図 29：リーフレット 2014 年

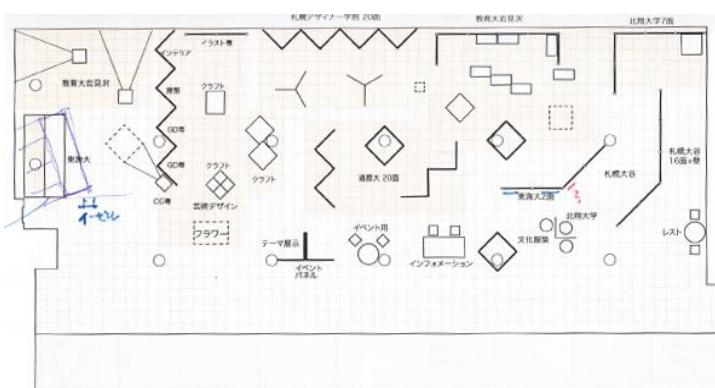


図 30：会場のレイアウト 2014 年

北海道内学生企画展「アートに触れる 2013」（図 29・30）

日時：2014年10月6日(月)～10月13日(月) 10:00～20:00(最終日 17:00)

参加学校：8校

札幌大谷大学、札幌デザイナー学院、東海大学(札幌)、道都大学、北翔大学、北海道

教育大学（岩見沢）、北海道芸術デザイン専門学校、北海道情報大学（五十音順）

総動員数：未定

本学の参加学生名・所属：

【個人作品】

一坪絵里香（国際文化学部デザイン文化学科3年）

関花恵（国際文化学部デザイン文化学科2年）

花崎浩美（国際文化学部デザイン文化学科3年）

【グループ作品】

藤森祥太（芸術工学部4年 藤森研究室）

小平一仁（芸術工学部4年 藤森研究室）

協力

佐藤駿永（国際文化学部デザイン文化学科3年 藤森ゼミ）

中畠翔（芸術工学部4年 大野研究室）

6.2 概要等

この年度は筆者の研究室に所属の学生（芸術工学部4年生）が同年度9月9日に「建築系ワークショップ S.O.Y」で作品発表したインスタレーション作品を再構成し展示した。両君は建学祭の展示会なども手掛けた経験もあり屋外展示の制作には慣れていたため会場にて効率的に設営することができた。デッキ状の床を模した作品の上を歩くと音色が響き、「鶯張り」を想起させるというユニークな体験型作品である（図31~33）。大型作品であるために搬送作業に苦労したが、校舎から会場への作品の運搬は本学の伊藤明彦教授に協力いただいた。

またこれとは別に本展示会への出品に積極的なデザイン文化学科所属の3名の作品を上記作品と離れたエリアにて展示した（図34~36）。展示壁は主催者より貸し出されたパーティションを利用し、他の学校との足並みを揃える方針とした。展示作品は3点とも見応えがありこの年度が最も成功していたといえる。加えて筆者の強い推薦で、レゴで作った大型作品の展示を検討したのだが、制作者である学生との打ち合わせの中で鑑賞者が触れると危険であるという問題を危惧し見送ることになった。前年度にガラス作品が破損したという苦い経験もこの判断に導いたといえる。

この年度は学校毎に展示エリアをグループ化せず分野ごとに作品を展示するイメージが実行委員会で提案され筆者も賛成であった。学校責任者の管理上の問題があり必ずしも十全に実現したとは言えないが、この方針は訪問者にとって展示が見やすく作品に触れやすい印象であった。またこの方法はこの種の展示会を「学校宣伝」に活用せずに当該分野の魅力を市民に発信し、あくまで純粋な展示会としての成功を目指すという当初の目的に沿った展示方法であるという実感を得た。



図 31：作品調整の様子 2014 年



図 32 : 「Singing floor」 藤森祥太、小平一仁、佐藤駿永他 2014 年

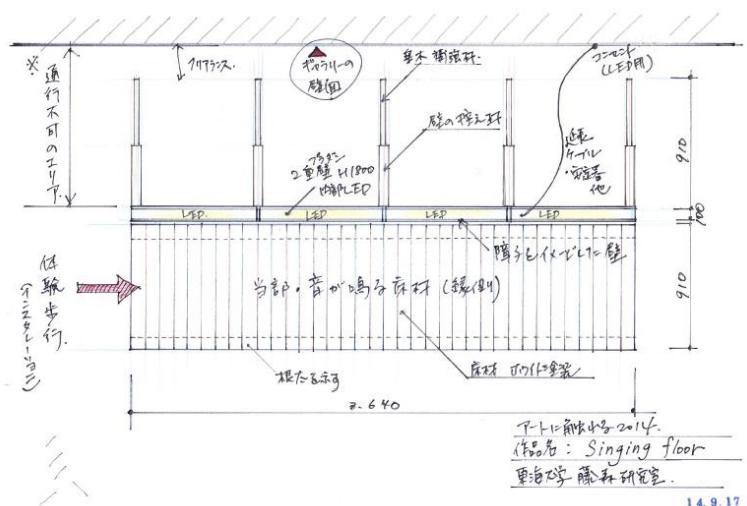


図 33：展示作品「Singing floor」の検討（作図：筆者） 2014年



図 34：「Awakening」 花崎浩美
2014 年



図35：「夜明けを待たず」 関花恵
2014年



図 36 :「自然の瞬間」一坪絵里香
2014 年

7. おわりに

2011 年から本学が参加した「アートに触れる」であるが、既述した通り反省点も多い。アート系の他大学、専門学校の学生作品を前に本学学生の作品の質が及ばなかつたと痛感することも少なくなかった。だが他大学の参加学生は卒業年度の迫った学生が多かったようだ。2012 年に設置された本学のデザイン文化学科の学生はようやく 2015 年度に 4 年生を迎える。今後の動向に大いに期待したい。

また、本学科の学びの特徴である「企画構想科目をコアとしたカリキュラム」の科目として、「デザインのスキル」に加え「思考のスキル」「コミュニケーションのスキル」が挙げられる。2 セメスターで開講された「ファシリテーション基礎」を皮切りに筆者が伊藤明彦教授と担当してきた「企画構想論・同演習」においては毎回のグループワーク作業により上記のスキルを磨いてきた。また本学科の「学びの特徴・特色」として「フィールド志向の実践の学び」(2012a) のなかに以下のように謳われている。

教室の講義だけでは不十分なため、教室から出て、実際のフィールドで現実と関わるための人間力の育成を重視し、活きたデザイン力を身に付ける。

「アートに触れる」はこうした機会を試すことのできる絶好のフィールドであった(図 37)。また主催者である北海道デザイン協議会会員の各分野のプロのデザイナーとの交流は学生たちにとって刺激のある機会になったことであろう。



図 37 : 展示壁設営の学生
2011 年

さて展示会の反省に戻ると 2013 年度においては、残念ながら学生の展示作品の力量は一歩足りない印象であり、筆者が担当した展示空間のデザインにおいても既述の通り設営の段取り不足、展示壁の傷み等の問題、作品鑑賞に必要な照度不足の問題等、反省要因の灘が残ったものであった。ただし同年度の運営面に関して言うと本学の果たした役割は大きかったと云えよう。当時 2 年生の工藤晴人君がリーダー兼ファシリテーターを、須永涼君が副リーダーを主体的に務め、定例実行委員会には常に参加し、他大学の意見を摩擦なくまとめ協議を行ってきた。

両学生は作品出品こそあまり関心が無いものの、企画会議では積極的に手を挙げ、展覧会の運営に携わり、展覧会を無事に終了させたといえる。現代社会のデザインにおける職能の変化に対応した、本学科が養成しようとする「フィールド指向の実践的教育を通して国際的な視点でデザインという知恵や技術を活用して、新しい生活文化創造のために行動できる実践力を備えた人材を育成する」(2012b) という目標に近づきつつある手応えを感じたと言えよう。両君には一つの展示会を造り上げていくというモチベーションが終始發揮されていた。おそらく教室での同質性の高いメンバーとのグループワークとは異なり、曲折も多く懊惱することもあったと推測できる。決して弱音を吐かない彼らの懇懃な態度が評価され、主催者の一人であり同展示会のプロジェクトマネージャーである北海道デザイン協議会専務理事・畠江俊明氏の後ろ盾を得ることができたと思われる。絶妙なタイミングで彼らにたびたび助言を与えて下さった同氏には心より感謝したい。また、両君の卒業後の進路にも注目していきたい。

さらに、リーダーこそ他大学の学生に譲ったものの、2014 年度の企画に大きく関わった関花恵さん（現在 2 年生）においては、札幌エルプラザ多目的室で行われた定例会議で話し合われた会議内容の議事録の作成に尽力し、会議を欠席した学生や教員との情報共有を目的に毎回フェースブックに上げていた。この年度、筆者は学内行事を優先し実行委員会に参加できないことが多かったが、詳細に渡って進捗状況を把握できた。また彼女は同展示会のために作品を制作し出展も行った。作品制作と企画提案の二つを実現したことは本人の自信につながったと思われる。彼女は 2012 年度も参加し、作品出品のみ行っていた。あくまでも筆者の個人的な意見であるが、作品の迫力には十分な成長を見ることができた。2015 年度にもこの展示会が継続して実施される場合、是非参加したいと考えている。

最後に 2013 年度にて実行委員会の代表を務め、展示会の企画運営に尽力した本学の工藤晴人君が 2013 年 6 月 20 日にさっぽろ大通コワーキングスペース、ドリノキレクチャールームでの打ち上げパーティーを終えて、フェースブック「アートに触れる」グループメンバーに投稿したコメント（一部抜粋）をもってこの原稿を終えたい。

今年のこの企画展では一人の出展者として、委員として、そして代表として 6 月末頃から運営に携わらせて頂きました。この企画の委員会には実に様々な大学、専門学校から、ユニークで才能豊かな学生達が集まり、意見を交わし、互いに刺激を与え合う。そんなワクワクするような時間を皆さんと共有出来たことを本当に貴重に、そし

て有り難く思っております。"後の祭り"なんていう諺がありますが、その言葉の通り、会期の6日間が過ぎ、最後の楽しかった打ち上げも終えた今、何だか少し寂しい心持ちでいます。

今年実施してみて分かったこと、上手くいったこと、もっと良くする点、ノウハウも沢山ありますが、それらも次に繋がるこれからのお「アートに触れる」企画展の運営に活きていくべきです。それでは、企画展に足を運んで下さった皆さん、2013年度委員の皆さん、作品出展者の皆さん、キュレーターの畠江さん、デザイン協議会の皆さん、各学校の教職員の皆さん、本当に有り難う御座いました。皆さんに支えられて一緒に走ったこの時間と経験を糧にして前に。それでは！お疲れ様でした！

東海大学 国際文化学部デザイン文化学科2年（現在3年）
工藤 晴人

謝 辞

この展覧会への参加は、本学の「2011年度 研究教育振興基金」、「2013年度 研究教育振興基金」及び「2014年度 研究教育振興基金」の助成により実現した。また2011年度には株式会社 片桐紙器より展示壁に使用するオフホワイト色の段ボール箱を惜しみなく提供していただいた。同社の屋根田和利氏に対してもここに謝意を記しておく。

参考文献

- 東海大学(2012a), 『授業要覧 2012 学部・学科編 国際文化学部 生物学部』, p.71
東海大学(2012b), 『授業要覧 2012 学部・学科編 国際文化学部 生物学部』, p.72

(受付：2015年1月31日 受理：2015年2月25日)